

---

# 理想郷

這沢

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想郷

### 【Nコード】

N6552P

### 【作者名】

這沢

### 【あらすじ】

古き良きものだけが唯一、僕を喪失感で満たしてくれる。

・・・これ、あらすじなのか。

（里山談）

泡立つ海を背にして一人、砂浜から上がってくる少女。伏し目がちな視線は誰かの足跡を辿っているかのように見える。

「たとえば、この世界が一枚の風景画だったとして……」

少女の唇の動きに、言葉はごく自然に乗った。

瞳の色はスミレの花を思わせる。空に垂れこめた鈍色にびいろの雲が、足元に迫る勢いで陰りを落としているからなのかもしれない。まだ力もメも訪れない夜明け前の海辺の景色には、よりいっそう青が被っていた。

「あら、あそこにも」

次第に海は遠ざかり、古びた小屋が近づいてくる。

「虫食い穴は至る所に開いているのね。『何か通った？』って訊いてしまふ位おかしい間とか、二度見してしまふ光景とか……………」

小屋の前では地を這う風の唸り声や、パタパタとはためく音が盛んにして、小さな呟き声など簡単にかき消されてしまふ。少女は風に乱れる髪を片手で押さえつつ、小屋の扉を叩いた。

「誰かー、居ませんかー」

しばらく待ち、再度叩く。

小屋の中から応答はない。

「……変ね、私。居るのを分かっている、誰かだなんて」  
構わず少女は続けた。

誰かに聞かせるように。

「いいわ、居ても居なくても。確かにここは虫食い穴だもの。おおよその時の流れから外れて、歪曲してしまった場ルットの一つ。どうやらその轍わだちに乗ってしまったようだし。これから行く先々でその存在に気付けば、何回でも乗り換えるわ。何故って、快いからよ。いつだって私の心は快い方を選んでしまふ。なんて不自由なのかしらね」  
言い終えた少女の髪には、淡い花びらが幾重にも積もっていた。

いつの間にか無数の花が降り注いでいる。

見上げた先には小屋の高さ五倍は優に超える、幻のような波が忍び寄っていたのだ。

「見える？ あなたにも……」

僅かに手を差し出す仕草を見せ、途中で止める。

地鳴りと怒涛が一気に押し寄せた次の瞬間、

全ての明るさが一点に吸い込まれて消えた。

「……くん、里山くん」

呼ぶ声に顔を上げると、よく見知った顔があった。

世間はクリスマス前夜だというのに、僕と古本の修復作業というボランティアに付き合ってくれている。彼女は奇特な学友だ。

「大丈夫なの？」

大丈夫、と答えようとして彼女の視線が下に向いていることに気づく。

あろう事か、机上の僕の手は彼女の手をしっかりと握りしめていた。

「はっ、津波が……また、妙なものを。いいや、違うんだ。この手がいけなかった」

パツと手を放したものの、その後の定位置が分からずに頭を抱えてしまった。

傍から見れば、血迷った末の支離滅裂な言動ではあるが。

本のページの真ん中に、ポツカリと開いた穴がある。それを何度も見返した。直径一センチ弱の丸い穴で、何かが突き通ったかのような痕だ。いや、何かを突き通したというべきか。

「うーん。これはひどいね」

彼女が身を乗りだし、僕の手元まで顔を近づけてきた。

ページをめくっては「修復用の和紙はあつたっけ……」などと言っている。

彼女から、ほのかに漂う温かい香り。白い花のジャスミン。

五感にいつもの現実が戻ってくる。

「……………あのさ、僕は寝ていたのかな？」

間抜けな質問だ。

「え？ 急にうつむいて、それっきり動かなくなったから、さすがに疲れてそうだったのかと思ったけど。なんか、うなされてもいたし」

そう言う彼女に対して、

「僕は本の欠損部から非日常的な世界を覗いていて、ぼーっとしている時は大概その状態なんだ」とはとも言えない。

言えば間違いなく精神を疑われるだろう。二、三步後退りされ、嫌悪の視線でもって友情を撤回される可能性も否定できない。大袈裟だろうが、現在の繋がりを絶たれることが何よりも怖いのだ。

「ごめん。寝ていたんだろうな、きつと。……………うん。よし」

自らの頬を両手でバシバシと叩いた。一連の様子を終始見ていた彼女がクスリと笑う。

「その前に一回、休憩しようか？」

席を立ち、しばらくしてから戻った彼女は、小さな箱をブラブラ揺らしてみせた。

「ほら、実はケーキもあるの」

ティーカップに注がれる紅い水色。立ちのぼる甘くほろ苦いスパイスの効いた香りの湯気。お茶を淹れる彼女の面差しに、以前どこかで憶えた感覚が蘇る。

子供の時だったか、それより遙か昔だったとか有り得るのだろうか。

「ぶつ。里山くん……………フォークが口に入っていないけど」

ケーキを口に運ぶためのフォークは、僕の頬に突き刺さったままだ。

「う……………ごめん」

また、笑われた。

我ながら呆れ返り、思った。

僕は何回彼女の笑顔を見れば満足するのだろう、と。

何処からとも無く去来する、普遍的な懐かしさ故なのか。

それは彼女の姿を借りて佇み、いつまでも消えることはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6552p/>

---

理想郷

2011年1月3日20時11分発行